| | |
|---|---|
| 事例No. | 3702 |
| 公表年度 | R7 |
| 団体の属性 | 町村 |
| 団体名 | 埼玉県横瀬町 |

| | |
|---|---|
| 事例区分 | 地域活性化 |

| | |
|---|---|
| | ・公共施設活用<br>・副業・兼業活用 |

| | |
|---|---|
| 事例種類 | 地域活性化 |

事例内容・タイトル

チャレンジで人と人とがつながり感じるプロジェクト

出典

地方自治研究機構　先進事例調査研究（令和7年度）

# チャレンジで人と人とがつながり感じるプロジェクト

取組のあらまし

取組団体　埼玉県横瀬町

取組内容　人口約 7,500 人ながら首都圏から近い立地を活かし、移住に限らない関係人口の創出を目的に 2016 年「よこらぼ」を設立。官民連携による提案実施型事業を推進し、Area898 や NAZELAB などの拠点を整備し交流を拡大している。

推進体制　３名（令和７年度）

予　算　等　1,897,000 円（令和７年度）

## 1　埼玉県横瀬町の概要

| | | |
|---|---|---|
| 人　　口 | 7,516 人 | 令和７年 11 月１日現在（住民基本台帳人口） |
| 職 員 数 | 95 人 | 令和７年 11 月１日現在（一般行政部門：教育部門等の事例は各々の人数） |
| 総 面 積 | 49.36 ㎢ | 令和７年７月１日現在（国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」） |

図表 １　埼玉県横瀬町の位置図

## ２　取組の背景・目的

### (1) 取組の経緯

町は、人口約 7,500 人の小さな町であるが、首都圏から電車で 1 時間強とアクセスが良く自然豊かな環境に恵まれている。しかし、少子高齢化による地域の活力低下が懸念される中、町は、「関係人口」の創出に着目し、移住定住ではない多様な関わりを持つ人々を積極的に呼び込み、地域内外の人材が協働することで新たな価値を生み出す政策として、2016 年に官民連携プラットフォーム「よこらぼ」を立ち上げた。

よこらぼ開始当初から、様々な方面から提案が続々と寄せられた。創設から 2023 年までの７年間で提案 234 件のうち 141 件を採択し、企業の最新技術を活用した地域課題の実証や、地元有志による特区制度の活用など、数多くのチャレンジが町内で実現されてきた。

特に、2019 年に、町民団体の提案を受けて、プロジェクト交流拠点「Area898（エリアはちきゅうはち）」を設置させたのをきっかけにして、2021 年 10 月の ENgaWA 駅前食堂、2022 年５月の LAC 横瀬、７月の「NAZELAB（ナゼラボ）」等の拠点施設を整備することによって、まちの交流エリアを形成してきた。

### (2) 取組の特徴

「よこらぼ」は、町役場が窓口となって、民間から町を社会実験の場とするプロジェクト提案を募り、審査・採択・実施・伴走支援までを行う取組である。町内における新しい発想の官民連携の取組の実施を通じて活性化を推進するモデルの先行例ということができる。

図表 ２　よこらぼの仕組み

出所：よこらぼホームページ

## ３　取組内容

### (1) よこらぼ（横瀬町とコラボする研究所）

「よこらぼ」は、町が提供する官民連携のチャレンジ支援プラットフォームである。応募にあたって業種や活動分野を問わず門戸が開かれている点が特徴で、企業の新規サービス実証から学生の社会実験、NPO の地域貢献活動まで様々なプロジェクト提案が寄せられる。

町は、毎月審査会を開き、提案者と町民(町)の双方にメリットがあるかどうかで採否を判断する。採択後は、町役場の担当者が中心となって事業化を伴走支援し、必要に応じて関係者調整やフィールド提供、広報協力などを行っている。

一方で、７年間同じ仕組みで運営してきたことから、社会環境や町のニーズ変化に合わせて制度をアップデートする必要も生じ、町は、2023 年秋から半年間、新規提案の受付を意図的に休止し次のステップへの充電期間とした。その期間で「よこらぼ 2024」と題し、住民、よこらぼ提案者等と一緒に「振り返り」や「今後」についてディスカッションし、横瀬町内で起業したい人を支援するため「起業支援型よこらぼ」を伴走する形で 2024 年 12 月からスタートした。

休止期間後も含めて、2016 年９月から 2025 年 11 月末までに、よこらぼで提案されたプロジェクトは 273 件、採択されたプロジェクトは 159 件にのぼり、環境・エネルギー、医療・福祉、観光・産業振興、教育・子育て支援などテーマは多岐にわたる。

特にスタートアップ企業や大学との協働が多く、横瀬町をフィールドとした実証実験が全国展開・事業化につながるケースも生まれている。また、地域の課題解決を目的とする住民発の提案も数多く、例えば空き家活用や公共交通、高齢者見守り、AI 関連の実証など、町民主体のチャレンジもしっかり支援されている。

### (2) まちなかの活動拠点の形成

#### ア Area898・Area899（コミュニティスペース）

よこらぼから生まれた代表的な成果の一つが、町民有志による提案をもとに実現した交流拠点オープン＆フレンドリースペース「Area898（エリアはちきゅうはち）」である。「人が交わるリアルな場をつくりたい」という町民の思いを形にしたもので、使われなくなっていた JA ちちぶ横瀬支店の旧直売所を提案者と町が改修し、2019 年４月にオープンした。

図表 ３　Area898

出所：Area898ＨＰ

名称の“898”は「ヤ(８)ク(９)バ(８)＝役場」に由来し、「役場をもっと身近に感じてもらいたい」という願いが込められている。その名のとおり、役場が運営する誰もが気軽に立ち寄れる開かれた場として設計されており、約 120

㎡のフロアにはイベントやワークショップ、会議、自習などに自由に使えるスペースと設備が整う。テーブルやカウンターは、地元の大工が旧直売所の棚をリメイクして製作した特注家具や「よこらぼ採択者」が使用していない什器などで、ブランコやボルダリングウォール、本棚など、遊び心あるインテリアも配置されている。

また、Area898 の２階部分には「Area899」と呼ばれる交流スペースも整備された。Area898 と一体的に運用され、大人数イベント時のサテライト会場やものづくりワークショップ、親子の居場所や学びの場などとして活用されている。

当初はイベント開催時のみ不定期でオープンしていたが、持続的な運営体制を模索するなかで、現在では利用者が多くなったため、毎日開放する体制へと移行した（利用無料・一部有料サービスあり）。現在では町内外の多様な人々が集う場となっており、2019 年の開設から 2025 年３月末までの延べ利用者数は、２階の Area899 を含め 37,000 人を超える。世代や立場を越えて交流が生まれる、地域の象徴的なコミュニティ拠点へと成長している。

### イ NAZELAB（こどもの第３の居場所）

子ども向けの学び・居場所づくりの拠点として、日本財団の助成を受けて 2022 年７月にオープンしたのが「NAZELAB（ナゼラボ）」である。運営を一般社団法人タテノイトが担っており、認可外保育施設「タテノイト」と一体的に、３歳から 15 歳まで通える、学校でも家庭でもない“第三の居場所”を提供することを目的としている。

Area898 に隣接する旧 JA 直売所の駐車場跡地に整備された館内には壁一面の本棚に科学・自然・工作など好奇心をくすぐる書籍が並び、顕微鏡や工作道具を備えた実験スペースも用意されており、平日日中や放課後に多様な子どもたちが集い、「なぜ？」という好奇心を存分に探究できるプログラムが展開されている。

NAZELAB 開設後 Area898 等と合わせ地域全体で子どもの成長を見守り支える体制づくりにもつながったといわれており、「町の中心（ヘソ）ができてきた」と評価され、世代を超えた交流と学びの循環拠点としての発展が期待されている。

図表 ４　NAZELAB

出所：タテノイト HP

### ウ 宿泊付コワーキングスペース「Lab 横瀬」

2022 年５月にオープンした「LAC 横瀬（2024 年 10 月から Lab 横瀬）」は、Area898 に隣接し、町内外の人が滞在しながら仕事や交流ができる施設である。赤茶色の外観が町並みに溶け込む落ち着いた建物で、1 階は交流スペース兼コワーキングスペース、２階は宿泊可能な個室と共用のドミトリーいう構成になっている。町の交流拠点群と宿泊施設とが一体となった「滞在交流拠点ゾーン」を形成している。

武甲山麓の自然を感じつつテレワークや創作活動を行う姿も見られる。他方、地元の利用者にとっても先進事例に触れたり移住検討者と交流したりする場となっており、関係人口と定住人口を繋ぐハブ的な役割を果たしている。

エ ENgaWA（食と農のチャレンジ拠点兼コミュニティカフェ）

農業資源に恵まれた横瀬町では、農産物を活かした新産業の創出や交流促進においても独自の取組が進められている。その中心的役割を担うのが、地域商社的な機能を持つ株式会社 ENgaWA（エンガワ）である。ENgaWA は、地域おこし協力隊員らを中心に 2021 年９月に設立された地域商社であり、地産地消の推進、新たな特産品の開発、交流拠点の運営を一体的に展開している。

同社が最初に取り組んだのは、横瀬駅構内の観光案内所に併設された食堂のリニューアルである。2021 年 10 月に「ENgaWA 駅前食堂」として再開し、登山客や観光客、地元住民が気軽に立ち寄れる山小屋風のカフェレストランへと生まれ変わった。店内では、横瀬産の野菜やキノコ、味噌など地元食材をふんだんに使用した郷土色豊かなメニューを提供している。

さらに ENgaWA は、旧給食調理場跡地に屋外型の「チャレンジキッチン ENgaWA」を展開している。ここでは、通常営業の他、地域食材をテーマにしたマルシェ、ワークショップなどが開催され、食と交流を通じて新たな地域活力を創出している。

(3) その他の取組

上記のほかにも、横瀬町では「みんなでつくる日本一幸せな町横瀬協議会」の活動や、町公式 note を活用した情報発信、関係自治体との広域連携など様々なチャレンジ施策を展開している。2022 年に設立された同協議会は、誰一人取り残さない幸福度の高い町づくりをテーマにワークショップや勉強会を行っている。

行政内部でも職員有志によるプロジェクト提案が活発化し、過疎地域の移動販売や空き家利活用モデル構築といった新規事業が次々と生まれている。また 2025 年には西武鉄道と包括連携協定を締結し、公共交通の維持や観光振興、防災力向上など「チャレンジを共創」するパートナーシップを強化した。このように官民の枠を超えた多様な連携により、暮らしやすさ日本一・幸せ日本一を目指す横瀬町の挑戦は年々広がりを見せている。

(4) 取組の推進体制

横瀬町のチャレンジ支援プロジェクトを推進する体制は、行政と地域人材の緊密な連携によって支えられている。町役場ではまち経営課内に「連携推進室」を設置し、よこらぼ事務局として企画立案から広報まで全般を担っている。担当職員は提案者との事前相談やコーディネートも行い、必要に応じて町内外の関係者を繋ぐハブ役となっている。

## ４　成果・課題

### (1) 成果

横瀬町の「チャレンジで人と人がつながる」取組の成果としては、官民連携プロジェクト数の累積 159 件（採択率約 60％）や、Area898 グループ拠点の累計利用者数延べ 37,000 人超といった数字が示す通り、町内外から多くの人材・アイデアが集積し、交流や起業が創発されていることが挙げられる。

また、取組を通じて人々の意識変革とネットワーク形成が進んだことも大きな成果であるとしており、町民の間には「失敗を恐れずまずやってみよう」という機運が醸成され、行政内部でも従来にない柔軟な発想で施策立案に挑戦する土壌が育まれているという。

さらに、よこらぼ参加を機に移住した若者、地域企業と協働して起業した都市部人材、二地域居住を始めたクリエイターなど、横瀬町をフィールドに多様な人々が関わり続ける好循環が生まれている。これらの人々が町の魅力を SNS 等で発信することで新たなファン層も広がり、観光消費や関係人口の増加につながっている。

対外的評価も高く、2023 年２月に総務省ふるさとづくり大賞優秀賞を受賞、続いて同年 11 月には「マニフェスト大賞」コミュニケーション戦略賞優秀賞も受賞し、全国の自治体関係者からの視察・問い合わせが相次ぐ状況であるとしている。

### (2) 課題

課題としては、取組の持続性確保が挙げられる。よこらぼ事務局、ENgaWA 社など中核を担うメンバーは少数精鋭であるが、活動の拡大に伴い、人的リソースの確保・育成が重要な課題であるとしている。特に、Area898 の常設開放やイベント企画など、継続的な現場運営にはボランタリーな協力が不可欠であり、地域おこし協力隊員や地元有志への負担が偏らないよう、支援者層を広げていく体制整備が求められる。

また、再始動時の基本方針で示されたとおり、採択プロジェクトを一過性の取組に終わらせず、実証段階から恒常的な実装・展開へとつなげていくことも課題である。

さらに、現在は中心部に集中している活動拠点の取組効果を、「横瀬町および町民が抱える課題」に焦点を当てつつ、山間部の集落など周辺地域へ波及させることが求められる。こうした取組の広がりを通じて、「町民すべてが主役」のカラフルタウンの実現を目指すことが、求められている。

## 関連・参考資料

地方公共団体金融機構ホームページ「チャレンジで人と人とがつながり感じるプロジェクト」
横瀬町「よこらぼ再始動について」
https://www.town.yokoze.saitama.jp/yokoze/rennkei/57646
よこらぼホームページ
https://yokolab.jp/
A898 ホームページ
https://area898.space/
タテノイトホームページ
https://tatenoito.jp/
ENgaWA ホームページ
https://www.engawa450.com/